

短期海外経験というきっかけ

【アイセック・ジャパン 団体概要】

文責： 一橋大学4年／アイセック・ジャパン事務局次長 荒川 征也
ARAKAWA Seiya

AIESEC（アイセック）は、1948年に設立され、オランダに本部を置き、世界110の国と地域に支部を持つ世界最大の学生NPO法人です。欧州の若者たちが国や民族の違いを乗り越え相互理解を深め、「国際的な視野に立ち、かつ自国の社会や人々の発展と成長に貢献しうる人財を世に送り出すこと」を活動理念として、「平和で、人々の可能性が最大限に発揮された社会」の実現を目指し、日々活動を行っております。以後、ネットワークは世界110の国と地域、およそ2,100大学に拡大し、約6万人の学生メンバーにより運営されています。

その一つの支部であるアイセック・ジャパンは1962年に東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、そして一橋大学の4大学の学生の努力により設立されました。現在では、政財界の数多くの方のご支援を受けて、全国に24の国内支部を持ち、約1,800名の学生が所属するNPO法人となっております。

AIESECは設立以来、一貫して海外インターンシップ生交換事業を主幹事業として活動を行っています。AIESECの海外インターンシップ事業は、①日本の学生を海外に送り出し、海外の企業・NGO等団体でのインターンシップを提供する事業と、②海外の学生を日本に受け入れ、国内の企業・団体等でのインターンシップを提供する事業の二つから成ります。人の流れをイメージして前者を「送り出し事業」、後者を「受け入れ事業」と呼んでいます。

近年では、世界中で毎年10,000名程度の学生がAIESECの海外インターンシップに参加しており、中国やインドといった新興諸国の学生の参加が急増しています。アイセック・ジャパンにおいては、2011年度、送り出し事業で約450名、受け入れ事業で100名を超える学生が海外インターンシップに参加しました。

それでは以下、海外インターンシップなどに参加した4人の弊社団体メンバーによる短期海外経験による学びについてのショートエッセイを記載させていただきます。ご一読いただければ幸いです。

【短期海外経験による学生の成長】

-国際感覚を養うということ

文責：慶應義塾大学4年／アイセック・ジャパン事務局長 高橋 諒

TAKAHASHI Ryo

私は2010年2月～4月、インド北西部のアーメダバードのスラムにある教育系のNGOでインターンシップを行いました。高校時代まで、海外経験がほとんど皆無に近かった私にとって、英語の講義を行うことや施設のシステムを作るというインターンシップ内容は心躍るものであった反面、不安も多かったのを強く覚えています。しかしながら、知り合いもおらず、肩書きも通じない異国の地で挑戦と挫折を繰り返した経験は本当に貴重な財産となりました。そして、自分や日本を客観的に捉え、異なる価値観を持った人々と協働した原体験はキャリア設計に大きな影響を与えています。

まず、「国際感覚」とはなんなのでしょう。インターンシップでの経験を踏まえた私なりの解は「日本人に向き合う感覚で、外国人と向き合えること」です。

インターンシップでは、同じインド人であっても、超エリートであるインド経営大学院の学生とも、1日1ドル以下で暮らす人々とも交流を持ちました。また、アイセックのプログラムを通じて15カ国ほどから来日している学生と共同生活を行っていました。国籍・宗教・経済的な豊かさなどが異なる人々と日常的に付き合うだけではなく、インターンシップにおいては共通の目標を定め、協働する機会も数多くあり、海外経験が少なかった私は、日常生活における感覚や習慣の違いに、当初は戸惑いを覚えることが多くありました。そうした時に、ふと「日本人と同じ感覚で、外国人と向き合えたらいいのに」という感情が湧き出てきたのでありました。

NGOでのインターンシップを終える時には、様々なバックグラウンドを持った人々は「親友」になり、過ぎゆく時間を心の底から楽しんでいました。つまり、国際感覚が少しずつではあるものの、身に付きはじめていたということなのでしょう。

今になって振り返ると、海外インターンシップでは「日本人と同じ感覚で、外国人と向き合う」ために必要な「相手の懐に飛び込み、素早く理解する能力」「自らの意見を臆することなく主張してみる能力」が格段と上昇したように思えます。というのも、インターンシップでは、自らに与えられた目標を達成しなければなりません。その中では、言葉は手段でしかなく、時に泥臭く遂行していくことも必要なのです。

インドでの日常はこんな感じです。アイデアを思いつく。インド人職員に粘り強く交渉する。インド人職員の長い演説がはじまる。ランチの時間では、ご機嫌取りのために仕込んできたインド映画の話をし、日本のスナックを試食してもらう。頭をこれでもかというくらいに使い、行うことのメリットを明確に考え、端的に伝える。イン

ド人職員が折れる。そして、いざはじめようとする、時間などの決めごとを様々な言い訳で守らないので、強く主張する。こんな繰り返しで、物事が少しずつ進んでいきました。

こうした国際感覚は「経験」でしか得ることが出来ません。だからこそ、異なる国で、異なる価値観や習慣を持つ人々の中で、揉まれつつも成功体験を積む、海外インターンシップに参加して良かったと心の底から思っています。

-グローバル人材に必要なもの

文責： 早稲田大学4年 木村 沙織里

KIMURA Saori

「求められるグローバル人材」「海外要員不足」などの言葉が新聞を賑わせています。巷では海外志向の学生を求める企業が増えていると報じられていますが、私はマスコミが騒ぎ立てる「グローバル人材」には違和感を覚えています。今海外で成功している人たちは、最初から海外を目指していたから成功したのでしょうか。本当は、日本とか海外とか、そんな概念は関係ないのではないのでしょうか。

2009年2月から4月にかけて、当時大学1年生の私はインド北部の小さな農村でインターンシップを経験しました。教育を通じて州の人々の幸せを追求するというNGOの目標のもと、私が任されたのは、小中学生向けの学童教室の企画・運営でした。現地の状況が何もわからない中、教室に乗り込んだ私は学童教室がテーマのない英語教室であると感じました。「もっと外国人だからこそできるテーマに沿ったものにできないか？」寮に帰るとボスにそう伝えました。返ってきた言葉は「じゃあ、今週からあなたが教室を企画して」。

それ以来、私は毎日子どもたちの家に通いました。何が子どもたちに必要とされているのかを知るためです。そして村の200人の子どもたちの家を、代わる代わる毎日訪ねて歩きました。聞き取り作業は、まず村の人たちと仲良くなり、信頼されることから始まります。インドのゆったりした時間の流れに合わせて会話や食事を楽しむことが必要条件でした。その中で、子どもの生活や学校での学習の様子を聞くことができました。「ムンバイのむこうには何があるの？」という疑問、「向かいの女の人が自宅での出産で亡くなった」という声。以来、インターン生が遊びや映像を通じて自分の国を紹介する異文化交流の授業と、女の子向けの性教育を行うことにしました。

こうして村の人たちと向き合ううち、自分は日本で自分の地域のために何をしてきたのだろうか、と疑問を持つようになりました。自分がよそ者としてインドの村と必死で向き合ううち、この村をより良くしていく主役はこの村の人たち自身だと考えるようになりました。それがきっかけとなり、逆に自分は地元でできることをやってきた

かどうか、自分に問うようになりました。その答えは、NOでした。こうした「地元志向」の大切さを、日本から遠く離れたインドで痛感することになったのです。

グローバル化する社会において大切なことは、自分にできることを目の前の人に対して行うことではないでしょうか。自分がどのフィールドに出て行くべきか、グローバルな視点をもって見渡し、対象と寄り添ってより良い社会を作っていく「地元志向」が重要だと思います。社会の発展に貢献できる人は、いつの時代もその社会に最も関心を持ち、自分にできることを追求した人でしょう。グローバル社会では、そのフィールドが世界規模になったものの、「地元志向」を求められる前提は変わりません。その意味で、グローバル人材とは単に海外に出ていける人材なのではありません。活躍の場が日本の農村であれ、途上国のスラムであれ、先進諸国の大企業であれ、目の前の社会を本気で変えようと挑む「地元志向」の人こそ、世界に求められるグローバル人材なのではないでしょうか。

-日本人として、世界で戦う

文責： 慶應義塾大学3年 戸澤 健太

TOZAWA Kenta

私は昨年、アイセックの慶應義塾大学委員会を代表して、フィリピンの首都マニラに2週間滞在しました。国際的な団体であるアイセックはフィリピンにも支部を持ち、現地のアイセックメンバーも日本のメンバーと同じように海外インターンシップ運営を行っています。私が現地で行ったのはフィリピンのアイセックメンバーのサポートでした。具体的にはマニラで日本人インターンシップ生を受け入れてくださる日系企業を探すことで、2週間で約15社の方々とお会いし、いくつかの企業様から受け入れていただけるというお返事をいただきました。活動内容は営業のようなもので、こういった企業に対してならアイセックのインターンシップ生受け入れがメリットを生み出せるかをフィリピン人のメンバーとともに考え、受け入れを検討していただけたような企業様にテレアポをして面会時間をいただき、提案をさせていただくというものでした。

この経験を通して、私自身の中で大きく変わったことが二つありました。一つめは、海外で日本人は自分しかいない状況において、外国人と協働することにより、世界の中で日本人としての自分がどう見られているかを強く意識するようになったことです。私を囲む現地の学生たちは私をまるで「日本の代表者」のように見ていました。そこで、自分と接した外国人は「私」というフィルターを通して日本を見るのだということを感じました。また、マニラで活躍されている日本人ビジネスマンの方々のお話をたくさん伺えたことは、日本のいいところ、悪いところを見つめなおすきっかけにも

なりました。

二つめは、国境を越えて、一人の人間としての能力を発揮できることが大切だと分かったことです。グローバル化する経済のなかで、国をまたいで人の行き来が激しくなっていくこれからの時代に、自分の国の中だけではなく、どこに行っても活躍できる人材がいかに重要かということを知りました。

こういった意識変化によって、私の心には自然と日本人としてのアイデンティティが芽生えてくるとともに、国際人として異なったバックボーンや価値観を持つ人とも互いを理解しあい、どのような環境にいても自分の持っている強みを最大限に発揮できる力を身につけたいという気持ちができていました。このような意識は、日本で生活しているとなかなか気づきにくいものです。しかし、海外での経験を積んだ今、このような意識を持つことが、グローバルで活躍し、日本の発展だけでなく世界の発展にも貢献できる人になるための第一歩なのではないかと私は考えています。外に出てみることで新しい視野が拓ける、短期海外経験はそのきっかけになるものだと言えるでしょう。

【短期海外経験をふまえた長期留学への期待】

文責： 慶應義塾大学3年 伊藤 弘喜

ITO Hiroki

海外インターンシップなどの短期海外経験は、海外旅行にも留学にもない大きな可能性と挑戦の機会を与えてくれます。そんな私は、大学1年時にアフリカはウガンダでの海外インターンシップを経験し、今は1年間の海外留学を控えている身です。私が1年生の時に経験したインターンの内容は、貧困地域に暮らす1日1ドル以下の生活を余儀なくされている家庭を調査し、その結果をインターン先のNGOに持ち帰り、どのような手段を持ち彼らにアプローチしていくかを議論・実施していくというものでした。その他にも幼児施設での教師サポートやファンドレイジングなど、インターン期間約2カ月間の中で、様々なことを経験することができましたが、ウガンダという途上国での海外インターンシップは苦難や葛藤の連続でした。目の前に広がる貧困問題にどう手をつけるべきなのか、どのような施策を行えばいいのか、そういった悩みもありましたが、日常的に私が大きく感じていたのは、自身の「英語」の問題でした。私は今まで英会話スクールや短期留学に参加し、英語力の向上に努めてきました。その為自身の語学能力については少しばかりの自信があったし、コミュニケーションという点においては問題ないと感じていました。しかしインターンは受動的な学びの場ではなく、NGOや他インターン生との協働が必要不可欠で、少なからず成果を求められる場であり、またこちら側からのアウトプットが求められるもので、そういった

環境に身を置いた際、何かいい案が思い浮かんでもそれを上手く説明できるだけの英語力がない、全体を巻き込み、イニシアチブをとり行動できないなど、不便を感じる以上に多くの挫折の原因になっていました。

自身が将来グローバルに活躍できる人材になりたいと思う一方、こうした自身の課題点に気づき、本気で悩める経験を早期にできたことは、長期留学という次の選択肢を決める指針にもなり本当に良かったと感じています。次の挑戦の舞台である長期留学では、自身の弱みを克服し、一歩ずつ世界で通用する人間になっていきたいと思っています。

上記の3名も私も、短期海外経験を機にグローバル人材になりたいという意欲や自らの課題を見つけ出し、将来を考えるようになりました。しかし短期海外経験だけで足りない力を身につけ、目標を達成することはできません。そこで得たことは、きっかけにすぎないのです。長期留学経験が短期海外経験でのきっかけを本当の国際人になるための成長につなげてくれることを期待しています。